
刺客剣客

東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刺客剣客

【Nコード】

N2163A

【作者名】

東風

【あらすじ】

「天下泰平」の世、武力のみを生業としてきた者達が段々と住み難くなってきたという時代に、ひよんなことから出会ってしまった二人が仁五郎と始めた「仕事」という新たに始めた剣客で世の闇を斬る、痛快なアクション時代劇

「フフツ当然だな」

榊左門は闇の中、苦笑いを浮かべていた。

左門の周りを四、五人の殺氣が包んでいた。

つい半刻程前、左門は賭場にいた。

今日は本当にツキがなかった。

出る目出る目がまるで、左門の意中を見透かされているかのようであつた。

「イカサマだ」

立ち上がりざま左門自身も思いもよらぬことを口走ってしまった。

しかしあとには退けない。

刀を抜いた。

この左門の行動に、騒然としていた賭場は異様な静まりを見せていた。

番頭に刀を向け左門は

「十両」

と、だけ口にした。そして十両を懐に入れると

「じゃまをした」

左門を囲んでいる殺氣は、賭場の用心棒であることは。容易に想像がつく。

「こんな最期も俺らしいか」

人気のない溜池の側にきたところで、殺氣を伺っていた左門はすぐに刀の柄に手をかけた。

急に殺氣が膨れ上がったのだ。

側の林の中からやっと殺氣を放っていた者達が姿を表した。

五人…どれもかなりの手練と見える。

柄にかけていた手を軽く握り腰をおとし、剣気がみのるのを待っていた。どちらもしりじりと勝機を伺う、

そして、剣気がみのったそのとき、抜刀一閃：一人目の腹を斬り裂き、二人目を頭から振り下ろし、三人目の心の臓を一突き。

それは一瞬の出来事であつた。

残りの二人も身構えてはいるものの、既に戦意は喪失しているようにとれた。

一方の左門も一瞬とはいえ、一度に三人を、しかもかなりの手練を相手に剣を交えたため、その疲労は測り知れない。しかし身を立て直し、間髪入れずに、

「キエエエツ」

と、先に仕掛けた。

敵も上段から振り下ろしてきたが、剣でかわし返す刀で背中に一太刀、正面を向いたところに腹を突いた。

これを見ていた残りの一人は悲鳴をあげて逃げた。

左門も追う気はなく、いや、追えるほどの体力もないほど消耗していた。

「ハアハアハア」

息も激しく、刀は既に杖でしかなかった。

息が整いかけたとき左門はハツとした。一つ異様な殺気が残っていたのだ。

それは先ほど賭場を出た時にうつすら感じていたものだった。

「しまった、見誤ったか」

左門は再度身構えたが、もう戦える力は残っていない。

殺気が姿を表した。

先ほどの五人も中々の手練であつたが、この男の放つ異様な殺気は格が違った。

「いよいよ終ったか」

あきらめていたが、男は一向に打ち込んでくる気配がない。

尚も身構えていると。男がおもむろに口を開いた。

「貴殿、名を何と申す」

「榊左門。お主は」

「ハツハツハ成程、お主があゝの左門だったとはな。うちの用心棒じや歯が立たんわけだ」

そついうと、男は刀を鞘に戻し、

「俺は八神大善」

時は十年前に遡る

豊臣秀吉が將軍として実権を握っていた頃、左門は前田家、大善は徳川家に遣えていた。

この頃には二人とも剣技の世界ではその名を轟かせており、

二人を

「龍虎」

などと例えられていた。

が、しかしこの頃は既に

「天下泰平」

が叫ばれつつあり、次第に武力よりも財力、知力といったものもてはやされる様になり、いわゆる腕っ節にしか脳の無いものはその職を追いやられるようになる。

左門も大善も例外ではなくそれから七年後、ほぼ同時期職を失うのである。

お互い噂を耳にすることはあつたが、目の当たりにするのは初めてだった。

大善が刀を収めると、左門も続けて刀をしまった。暫くの沈黙の後大善が口を開いた。

「どうだ、さつきお主が持つて行った金で一杯連れて行ってはくれぬか」

左門は一瞬意外な表情をみせたが、すぐに微笑み返しコクツと頷いた。

大善は見た目華奢で、顔立ちは右頬に三寸程の傷がある。女にもてそつだか冷たい印象だ。

左門が浮かべた意外な表情は、大善の外見と中身のギャップにあった。

さっきの賭場の近くの飲み屋で、ふたりは寡黙に酌をしあつた。大善が

「善き出会いに」

「ああ」

とだけ交すとまた半時沈黙が続いた。

そしてようやく左門が重い口を開いた。

「なぜ斬らなかつた」

左門は先ほどの大善に納得がいかなかった。

その剣ひと振りで間違はなく左門はこの世にいなかったはず。

大善は酒を飲み干し左門の目をじっと見たあと

「なあ左門、俺もお前も今や世間では使い途の無い犬、お前は野に放たれた野良犬、俺は飼い主がいるが犬は犬、飼い犬だ。こんな生業を二年もしてきて、俺もこの先が見えたと思つていたところだつた」

大善は肴のおでんを頬張り、酒を流し込んで続けた。

「さっきお前さんがうちの賭場荒らしたところから用心棒と一戦交えたところまで見て思つたよ。あんたと組めば俺達やもう一度この世に花あ咲かせる、返り咲けるつてね。なあ俺と組まねえか、組んでもう一度世に出ようじゃねえか」

冷たい印象の男の正体はこんなに熱い男だつた。

左門の職を失つた後は泥水するような、悲惨な生活であつた。

物心ついたところから、ひたすら剣の道に没頭してきたがゆえ食う為の知恵を知らず、この三年は食うや食わずの生活を余儀なくされ、自分の剣の腕を半ば恨んだこともあつた。

左門は大善の似たような境遇を思うと、込み上げるものがあつた。

「ああ、お主とならやっていけそうだな。」

その頃には斬らなかつた理由などどうでもよくなつていた。

左門はとつくりを持ち大善に酌をしながら、

「大善、今夜はあそこで賭場を荒らして良かった。でなければこうやってお主と酌を交すこともなかった。」

すると大善からは意外な言葉が、

「いや左門、実のところ荒らさなくても声をかけていたところだった。」

「えっ」

「実を言つと、俺よりも先にうちの賭場の番頭があんたが入って来たときから目をつけていたんだ。」

「さっきの番頭が。」左門は薄々気になっていたことがあった。

それが番頭の存在だ、番頭は見たところまだ三十半ばくらい、細い体つきで背の丈も普通より少し小さい感じを受けるが、さつき刀向けたときも肝が座つてるといつか、目の奥から鋭い眼光を放っていた。今よくよく考えると背筋が凍る思いだ。

「なあ左門、今から番頭に逢つてみないか。」

左門は今日の賭場荒らしのことがあり、

「大善、せつかくだが賭場荒らしといつて今更逢えた義理じゃねえや。」

「

すると大善は

「何言つてやがんだ、番頭があんたにあいたがつてんだぜ。」店を出て賭場についた。

「仁さん連れてきたぜ」

番頭の名は仁五郎、大善は土間口から呼ぶと

「さ、さ上がんな。」

左門はさつき荒らした賭場だけに後ろめたさを感じつつも、わらじをぬいだ。奥から

「善さん、客間に通しておくれよ。」

番台には別の人間が座っていた。

左門は大善に連れられ、客間に通されると本日二度目、仁五郎の顔を見た。

「さつきは悪かった。少しつかちまつたんだが……」

そう言いながら残りを返そうと懷に手をやると

「いやいやいいんだその十両は手付けだよ。」

不思議そうな左門に大善が

「いいんだよ。納めときゃ。」

仁五郎は話を続けた。

「これからこの善さんと一緒に仕事をやていってもらいたいんだよ。十両はその手付けさ」

「仕事ってのはどんな仕事だい」

横から大善が、

「仕事は仕事だよ。」

そう、ここで言う仕事というのは、殺し屋のことである。

依頼人から殺しを請け負いそして、成功報酬を頂くつまり

「仕事人」

なのである。

この時代は既に仕事人が点在していた。

しかし、仁五郎のところがよそと違うのが一つ、標的となる人間には絶対に非がないと請け負わないところだ。

「しょうがない大善との約束だしな。」

そして、左門は

「仁五郎親分、どうかこれから宜しく頼むぜ。」

「よしてくれよ、仁さんでいいよ、仁さんで。」

そういうと仁五郎は帳簿に目を通し始めた。

これでようやく闇稼業ではあるが、左門にも食い縁ができた。なにやら賭場が騒がしくなってきた。

賭場で揉め事のようにだ。

「ちよつと表出てくらあ。左門はもすこしゆっくりしな。」

そういうと、大善の表情が険しくなった。

さすがにそんな表情の大善は恐ろしい程凄味を増す。

「仁さん、ちよつと聞いてもいいかい」

「何だい」

「もし今日俺が本当の賭場荒らしだったらどうするつもりだったんだい」

帳簿に目をやった仁五郎は一瞬あの眼光を放ちながら、こっちに目をやると、

「そんなときや直接

善さんをおくつてたよ。」仕事 其の一

かれこれ五日過ぎた。仕事の無い日は専ら賭場の用心棒として見張っている。

いや、見張っていると言うよりただ座ったり寝転がったりしているだけだ。

左門がこの賭場に来てからはまだ仕事の依頼はない。

この賭場から中庭の渡り廊下を抜けた反対側は宿場である。

ここは賭場と宿場とを一緒に商いしていた。

仁五郎の父親が築いた宿に新たに仁五郎が賭場を開いたらしい。

いまは仁五郎の父親が一線を退いたため、事実上仁五郎が二つをとり仕切っている。

一方大善はというと、一年近く宿場の台所を手伝いながら料理を覚えていくらしい。大善曰く

「武士も手に職をつける時代。」

というのが実のところは台所で一緒に働いている、お千夜に密かに想いを寄せているらしい。

このお千夜はどこにでもいそうな普通の女だが一日中笑顔が絶えずなく、宿場では評判の女で、しかも年の頃十六歳という。

大善とは二十近くも離れている。

そして、大善が想いを寄せる理由はただこれだけではなかった。お千夜には辛い過去があった。

お千夜の家は五年程前まで大店の米問屋であった。お千夜もなに不自由なく生活していた。

その同じ町に米問屋がもう一軒あった。

「柳田屋」

という問屋だ。

柳田屋はお千夜の米問屋

「新之助米穀」

を快く思っていなかった。

規模こそ柳田屋のほうが大きいが、新之助米穀には勢いがあつた。

柳田屋の柳田孫六は日夜策を勞した。

ある日孫六は新之助米穀に出向いた。

気のいいお千夜の父であり新之助米穀の主人の新之助は、孫六を奥の部屋に通した。半刻程たった

「冗談じゃねえ」

兼ねては気のいい新之助が怒鳴り声をあげた。

「商売の邪魔だ帰ってくれ。」

「上等だよせいぜい商売には気を付けるんだな。」

孫六もそう言い放つて店をあとにしたが、孫六は相当腹に据えかねた様子。

新之助米穀への要求は一つ、柳田屋の暖簾を掲げることだそうだ。

そして夕方近くに悲劇は起きた。

新之助米穀に大八車が突つ込み次の瞬間、大八の荷台に積んであつた火薬が爆発した。

その日お千夜は友達と遊びに行つており、遊びから帰つて来て知ることとなつた。

突然行き場を無くし、当てもなくさまよつていたところを偶然通りかかった仁五郎に拾われた。

最初二年程は誰と口きくこともなく、表情の無い子だったらしい。

大善も仁五郎に話を聞くにつれ、お千夜にひかれるようになった。

仕事終わりに話をしたり、たまに一緒に散歩をする時間が大善の心を埋めた。

「左門さんちよいと客間に。」

すぐに仕事の話だと分かった。

左門が客間に入ると仁五郎が座つていた。しかし大善はいないよう

だ。

「仁さん大善は。」

と聞くと仁五郎は渋い表情を浮かべた。

「左門さん、初の仕事で悪いんだが今回の仕事は左門さん一人になりそうなんだ。」

「仁さん依頼主ってまさか…」

「お千夜だ。」

仁五郎から間髪入れずに答えが返ってきた。

左門はすぐに意味がわかった。

今の左門には冷静な判断など出来るはずがない、それが依頼主がお千夜ならば尚更危険だと仁五郎は思ったのだろう。

「仁さん、決行はいつ」

「明日の夜決行する、明日までに成るべく調査致す故よろしく頼む。」

「委細承知した。」

その夜左門と大善は酒を汲み交した。

「左門もうこの賭場には慣れたか。」

「慣れるも何も一日することといえば寝るか座るか賭場を歩き回るのがないだろう」

「それもそうか、慣れるところではないのう。はっはっ」

二人高笑いの後、大善が

「仕事の依頼でもあれば張り合いもあるだろうに。」

左門が微かに動きを止めた。

「そうだな、仕事するために来たがまだ仕事に一度も携わっていないからのう。」

「よし、明日も忙しくなりそうじゃ。もう寝よう。」

大善が話を早々に切り上げた。

大善は左門の動きを見のがさなかった。気になったが、その日は考えなかった。

次の日大善はやはり台所でお千夜達と精を出していた。

左門と仁五郎は客間にいた。

「左門さん今日の標的は孫六とその番頭を張ってる吉二郎の二人だ。今日二人は広間で話し合いをするらしい。」

実は五年前の爆破事件の絵図は吉二郎が描いていたのだ。仁五郎はそのことを左門に話した、

「承知した。」

「ところで今日のこと善さんには言っていないよね。」

「言つてはねえさ」

大善が洗い物を片付けていると、

「じゃあ今日はお先です。」

お千夜の声がした。

「はい、じゃあまた明日。」

それを聞いていた大善は。

「今日、お千夜ちゃんどうしたの」

「今日はあの子の両親の五年目の命日なのさ。」

大善はしばらく考えてハツとした。

「もしや」

大善は賭場に向かった。賭場には左門と仁五郎はいなかった。

「仁さんたちは」

壺振りに聞いた

「客間じゃないかな」

「やはり。」

客間の戸を開けると中には仁五郎と左門がいた。

「理由はなんだ。」

いきなり大善は言った

これに対して仁五郎は

「大体察しはついてるようだな善さん。」

そして仁五郎は、

「悪いが今回は善さんには……」

「ちよいと待つてくれ仁さんよ。俺が今目クラ同然とでもいいたそ

うだな」

「違うのかい」

大善は

「俺は俺の仕事をするだけだ。」

と叫ぶように答えた。

沈黙が流れたあと左門がようやく口を開いた

「二人とも熱くなるな。大善、今日は俺の初仕事だ、足引っ張るなよ。」

そして大善に薄笑いをうかべた。

「その言葉そっくりかえしとくよ」

大善に笑みが戻った。

夕方午の刻近くになった。左門も大善も士気が高まった頃、宿場から「大善さーん、大善さーん」

と呼ぶ声がする。

「どうした。」

「あ、大善さんこれを」

と言って渡されたのは遺書だった。それはお千夜からのものだった。大善は後ろを振り向いた。

「左門。」

その顔はさつきまでの士気に満ちた顔から一変して、不安一色となった。見兼ねた左門は、

「早く探せなければ、取り返しはつかぬぞ。あとは俺に任せろ。」

「済まぬ」

大善は飛び出して行った。

それからふた時たらずで左門は初の仕事に向かった。柳田屋の前に来た。

辺りはまっくらだ。

左門はほっかむりをして回りを伺うと塀を乗り越え屋敷に入った中庭まで走り火薬の入った筒に火をつけ店の方に向かって投げた。すぐにドーンという爆発音を聞き付け見張り役が二人出て来た。し

かしこちらに気付いてない。

「なんの騒ぎじゃ。」

孫六と吉二郎が出て来た。

左門はこの瞬間を待っていた。

カンシヤク玉で回りを煙で包んだ。

そして左門は煙の中で抜刀した。

見張り役が煙をかきわけると左門の姿はなく、あるのは首と胴体の分離した孫六と吉二郎だった。

左門にはあと一つ遂行すべき任務があった。

柳田屋の前まで左門が大八を引いてきていた。

次の日から柳田屋の者は全て無職になった。

近くを流れる河に人だかりができていた。

聞いたことのある男の声が泣きながら女の名前を叫んだ。

「おちよおお」

大善の泣き声だ

左門は小さく

「ちきしょう」

復讐を成し遂げた少女は一人空へ帰っていった。

次の日から大善は台所へ立たなくなった。

左門の初仕事は切なく苦い思い出になった。

仕事 其の二

左門がこの賭場に来て三月がたとうとしていた。

最近はどうやくこの賭場も落ち着きを取り戻し、平穏な日々が続いていた。

少し前までは賭場荒らしが立て続けに起こっていた。

というのも、左門が斬った五人の用心棒がいなくなったという情報が広まっていたのだ。

この五人の用心棒はこの界限ではかなりの脅威として轟かせていた。その五人が突然消えたことで賭場荒らしを生業としている者達には

絶好の穴であつたかに見えた。

しかしそれから二月程でその噂はガラリと変わった。

あの五人以上の脅威、しかもかつて国じゅうにその名を轟かせていた「龍虎」

がこの賭場の用心棒をしているということは一気に町中に広まりこの賭場にはかつての平和が訪れていた。

左門も大善も相変わらず暇を持てあましていた。

「左門さんちよつと」

仁五郎が手招きをした。

「左門さんちよいとことづかつてもらえねえかい。」

「何をだ」

「ある賭場で二日ほど用心棒をして欲しいんだよ。」

仁五郎が詳細を話始めた。

この賭場の主人の名を与一と言った。

仁五郎が賭場を開く前までこの与一のところに世話になっていたことがあつた。

その与一の賭場に最近荒らしが頻繁に起こっているらしい。

その夜から左門は与一の賭場で見張つた。

「いやあよくおいでなすつたさあ一杯」

と与一は酒をすすめたが、

「せつかくで悪いが酒が入るとどうも気が散るゆえ」

左門は仁五郎の賭場でも、酒を飲みながら張つたことはない。このへんは左門のまじめなところだ。

なにやら壺振りと客が揉め出した。

すると中にいた客五人が立ち上がり刀を抜きはじめた。

「こんなイカサマ博打にむざむざ金を取られて泣き寝入りをするつもりはない。」

と一人が言つと

「金を返しやがれ。」

刀を振り回しはじめた。賭場荒らしのようだ。

「旦那、お願いできやすい。」

左門は黙って立ち上がると身構え荒らしの方へ寄って行った。

「なんじゃお主」

左門の脇差しの辺りに閃光が走った。するとそのうちの二人が

「痛ええ」

と叫んだ。目の辺りから血を流していた。左門は

「安心せい。目の玉は傷付けてはおらぬ。瞼を一枚切っただけじゃ。」

「

その仲間の一人が

「左門じゃ、榊左門に違いない。」

左門の抜刀は、刀の影すら見えないとして有名であつた。

それゆえ閃光を見た者にはそれがすぐに左門のものとわかる。

その左門に太刀打ち出来るのは、この世でただ一人と言われていた。

それが八神大善なのだ。「さあ、もつと深手を負いたい者は参れ。」

さもなくばここから立ち去るがよい。」

左門の一言で賭場荒らしの者共は戦意を失い足早に逃げた。

「待てい」

左門が珍しく声を張り上げた。

「てめえら今度この町のどこかで良くねえ噂耳にしたらてめえらの

首跳ねにいくぜ。」

左門のこの言葉には荒らしの連中も震えあがつた。

しかし、そのことが後に思いもよらぬ事態を迎えることになる。

結局二日目は昨日のこともあり、与一の賭場は平穏だった。

左門は与一に二日分の用心棒代、二両を渡され賭場を後にした。

仁五郎のところに戻った左門は、賭場荒らしの事を詳しく話した。

「なるほど、そいつは左門さんを送り込んで正解だったな。二日間

ご苦労だった。」

「そうそう仁さん、こいつは与一さんからもらった用心棒代だ」

といって二両渡すと、

「そりゃあ兄貴が左門さんにつつて渡したもんだろ、黙ってとつ

ときなよ。」

仁五郎はこの界限ではかなりの人格者として通っていた。

左門も二両もの大金を、惜し気もなく譲るような度量の広さや人格にいつしか、心を開くようになっていた。

「何か心苦しい気もするのだがもらつとくぜ。」

「ああ」

「仁さん、その賭場荒らしの連中なんだが、手首に細く一回り墨のようなものがいれてあつたんだが。」

「黒い墨か。」

仁五郎はしばらくかんがえたあと、

「左門さん、こりや大田黒んところが流れこんできてるかもしれねえぜ。」

最近はその名を国じゅうにひろめつつある、

「大田黒軍団」

とは賭場を中心に金品を強盗している軍団でしかも色々な藩を渡り歩いてゐるため所在もはっきりしない手の負えない集団なのだ。

「いやな予感がしやがるぜ。」

仁五郎の予感は見事に的中した。

次の日の夜から、この土地の賭場や両替商などが狙われた。

その中の一軒にあの与一の賭場も含まれていた。

しかも特に与一の賭場は酷いやられようだった。

真夜中に仁五郎の賭場の戸を叩く音がした。

大善が戸を開けると、血まみれの与一が、戸にもたれながら立っていた、

「与一の旦那、一体どうしたんだい。」

与一は大善にもたれかかった。もう虫の息だった。

「兄貴。」

仁五郎が駆け付けてきた。

「兄貴、しっかりしろ。」

「仁五郎、こ、これで大田黒のれ、連中を。」

血まみれになつた十両を仁五郎に渡し、息絶えた。

「兄貴、兄貴。」

仁五郎は暫くうなだれたあと

「善さん、兄貴を奥に連れてきてくれねえか。」

与一は客間に寝かされた。仁五郎は口を開いた。

「この十両は仕事料、依頼主は俺だ。」

と言うと、左門と大善に五両づつ渡した。更に仁五郎は、

「なあ善さん左門さん、俺のわがまを聞いちゃくれねえか。」

「わがまとは。」

「今夜中に大田黒を仕留めてくれ。」

すると左門の口から

「どっちにしる今夜の仕事になるんじゃねえか。」

「なに」

「次の標的はこの賭場だよ。」

すると賭場の回りから殺気が漂い始めた。「そら、おいでなすつた。

ふむ、軽く二十はいるな。」

左門の予想はほぼ的中した。

「行こう。」

左門と大善は表に出た。軍団の群れのなかに一際大きな人影があつ

た。大田黒だ。

「斬れ。」

大田黒の一言で二十余りの軍勢が一気に襲つて来た。

左門が柄に手をかけると、大善がその手を押さえた。

「見てろ。」

そついうと大善は刀を抜かずに懷の短刀を取り出した。

その短刀を逆手にもち、まるで舞っているかの如くふわふわと軍勢

の中を抜けていった。

短刀が当たっているのかも解らない程であつたが大善が通つた後に残るのは死人の肉塊のみであつた。

左門は初めて見る大善の太刀筋に不気味な脅威を覚えた。
あつという間に軍団は半分ほど減った。

そこで大善は今まで使っていた短刀を懐にしまい、腰の刀を抜き下段に構えた。

残りの十名余りが大善を取り囲み、一斉に襲いかかる。

その状況にきて大善は目を閉じ自分の体を軸に刀は円を描いた。

そして敵は大田黒一人になった。

一息も入れずに大田黒に向かったが、勝機を焦った大善はあろうことか小石につまづき転んでしまった。

「しまった。」

と思った時は既におそく、大田黒は大善の頭上に刀を振りかざしていた。

「万事休すか。」

大善が諦めかけたとき、

稲光にも似た光が走った。

大善が顔をあげると、大田黒は首から血濺きをあげ倒れた。

大善が後ろを振り返ると左門が刀を鞘に戻しながら、

「お主が敵でなくて良かった。」

「それはお互い様じゃ。」

「そしてその二人を雇えたわしは、最高に運がよかった。」

仁五郎も出てきた。

「左門さん善さん、今日は飲もうじゃねえか。俺の思い出話でも聞いてくれよ。」

その夜三人は酒を汲み交し、仁五郎は与一との思い出話を、夜が明けるまで喋り続けた。

（後書き）

私自信、小説自体を書くのは初めてで内容も中途半端に終わってしまいました。

またリクエストなどがありましたら。続きを執筆させていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163a/>

刺客剣客

2010年10月9日02時58分発行